

# 東日本大震災被災三県沿岸地域の学校における震災学習の現状—総計の報告を中心として

○齋藤 玲<sup>1)</sup>・小田隆史<sup>2)</sup>

- 1) 学術・一般 宮城教育大学、e-mail ryosaito@staff.miyakyo-u.ac.jp
- 2) 学術・一般 宮城教育大学、e-mail oda.tak@staff.miyakyo-u.ac.jp

## 1. 背景と目的

災害の経験や教訓を後世に伝承し、次なる災害に対して備える防災教育を遂行する上で、学校教育は大きな役割を果たしてきた。とりわけ災害を実際に経験した被災地においては、一般的な災害のメカニズムや備えに関する知見に加えて、その地域がどのような被害を受け、そこからどのように復興したのかを含めた一連の学び（以下、震災学習）の機会として、身近な地域を伝承し、生き抜く力を身につけさせる防災教育が、様々な試行錯誤のなかで展開されている。本研究では、東日本大震災で甚大な被害を受けた被災三県の沿岸地域に面する学校における震災学習の現状について明らかにすることを目的として、調査を行った。

## 2. 方法

### 2.1 対象と調査時期

対象は、岩手県と宮城県、福島県の沿岸地域に面する自治体に属する小学校と中学校の524校であった。調査時期は、2020年冬であった。524校のうち297校から回答を得た（回収率は56.68%）。

### 2.2 材料

質問紙は、貴校の教育計画（今年度）における震災学習（実際には震災伝承・震災学習という聞き方をした）で「扱う内容」と「扱う時間」、「扱う資料・素材」、「主たる課題」、「取り組みの十分さ」で主に構成されていた。震災学習で扱う内容は19問（その他を含む）、扱う時間は17問（防災訓練以外の行事、その他を含む）、扱う材料（その他を含む）は21問、主な課題は17問（その他を含む）、取り組みの十分さは1問であった。扱う内容は4件法（まったく扱わない、あまり扱わない、ときどき扱う、必ず扱う）とした。取り組みの十分さも4件法（まったくそう思わない、あまりそう思わない、ややそう思う、とてもそう思う）、それ以外は2件法（はい、いいえ）とした。なお、カリキュラムマネジメント上の工夫といった自由記述も求めたが、ここでは報告しない。

### 2.3 手続き

質問紙と返信用封筒を各学校に郵送し、返信を得た。なお、本研究は、宮城教育大学と河北新報社（本社・仙台市）との連携協定に基づいて実施したアンケートに基づくもので、分析結果の一部は、2020年5月11日付河北新報朝刊に公開された。回答者は、同社新聞報道および学術研究に回答内容を用いることを承諾の上、回答した。

## 3. 結果と考察

本発表では、扱う内容と、扱う時間、扱う資料・素材、主たる課題の総計を報告する。表1の扱う内容については「必ず扱う」と「ときどき扱う」を合計した割合に着目して、考察する。他の項目と比べて、地震・津波のメカニズムや自助・共助・公助の考え方、将来の災害の備え等といった項目の割合が大きかった。一方、原子力発電所事故や被害の規模（犠牲者数等）、災害時の人間の認知・行動の特徴、風評被害、貴校（区）の災害発生当時の様子に関する項目の割合は小さかった。特に、原子力発電所事故や風評被害の割合が小さかった。

表2の扱う時間から、理科と社会、道徳、総合的な学習の時間、特別活動、学校の防災訓練、避難訓練が多かった。一方、教科等横断的な震災学習の実施が望ましいとされているが、教科に偏りがあることも明らかとなった。他の教科の教科書にも震災学習に関連する内容が盛り込まれていることがある。このようなことを考えれば、他の教科において震災学習を行うことも重要だろう。

表3の扱う内容から、教科書、県作成の副読本、市町村作成の副読本、ハザードマップ・防災マップ、一般的な画像・絵・写真の割合が大きかった。一方、マンガ、ドラマ・映画、VR・ARは、その割合が小さかった。これらのことから、教科書や副読本は、学校の教材として身近であるために、比較的扱われやすい資料・素材等であることが理解できる。一方、マンガ、ドラマ・映画、VR・ARといったもののなかでも、特にVR・ARは学校にとって身近なものではなく、扱われにくいものであるのかもしれない。

表4の主たる課題から、主たる課題として、授業／学習活動のための時間が確保できない、震災を知らない児童・生徒が増えているが挙げられた。一方、指導方法がわからない、地元地域の理解・協力が得られない、学校の中で震災関連の行事が減少、地元地域での震災関連の行事が減少の項目は他の項目と比べて、その割合が小さかった。主たる課題の一つの授業／学習活動のための時間が確保できないは、学校の多忙化を背景にしたものである

表1扱う内容

	1:まったく扱わない	2:あまり扱わない	3:ときどき扱う	4:必ず扱う	99:無回答					
地震・津波等のメカニズム	3.70	11	11.11	33	32.32	96	52.53	156	0.34	1
原子力発電所事故	13.80	41	33.33	99	21.21	63	30.98	92	0.67	2
災害救助・支援活動	2.02	6	8.08	24	40.40	120	48.82	145	0.67	2
災害ボランティア	3.03	9	13.47	40	42.42	126	40.74	121	0.34	1
自助・共助・公助の考え方	0.67	2	4.04	12	36.36	108	58.59	174	0.34	1
被害の規模(犠牲者数等)	4.71	14	28.96	86	37.37	111	28.62	85	0.34	1
自然災害の脅威・おそろしさ	0.34	1	3.37	10	26.94	80	69.36	206	0.00	
災害時のこころのケア	2.02	6	16.84	50	37.37	111	43.77	130	0.00	
災害時の人間の認知・行動の特徴	5.72	17	33.33	99	36.36	108	24.24	72	0.34	1
風評被害	15.49	46	45.12	134	28.62	85	10.44	31	0.34	1
災害時の情報活用	1.68	5	15.49	46	40.74	121	41.41	123	0.67	2
復旧・復興までの道のり	1.68	5	13.47	40	40.40	120	44.11	131	0.34	1
災害伝承・語り継ぎ	3.70	11	19.53	58	36.36	108	39.73	118	0.67	2
過去の災害の歴史	2.69	8	18.52	55	36.70	109	41.41	123	0.67	2
将来の災害への備え	0.34	1	2.02	6	24.24	72	73.40	218	0.00	
ハザードマップの存在・重要性	2.02	6	5.72	17	37.04	110	54.88	163	0.34	1
貴校(区)の震災発生当時の様子	6.06	18	28.28	84	34.01	101	31.31	93	0.34	1
一般的な震災発生当時の様子	3.37	10	18.86	56	46.13	137	31.31	93	0.34	1

左の数字は%を示し、右の数字は個数を示す。

表2扱う時間

	いいえ	はい		
国語	86.87	258	13.13	39
算数・数学	97.31	289	2.69	8
理科	44.44	132	55.56	165
社会	42.09	125	57.91	172
音楽	99.66	296	0.34	1
体育・保健	84.18	250	15.82	47
生活	87.21	259	12.79	38
家庭・技術	90.24	268	9.76	29
道徳	61.28	182	38.72	115
図画工作・美術	98.99	294	1.01	3
英語・外国語活動	97.64	290	2.36	7
総合的な学習の時間	25.25	75	74.75	222
特別活動	46.13	137	53.87	160
学校の防災訓練・避難訓練	10.10	30	89.90	267
地域と連携した防災訓練	64.31	191	35.69	106

左の数字は%を示し、右の数字は個数を示す。

表3扱う資料・素材等

	いいえ	はい		
教科書	46.46	138	53.54	159
県作成の副読本	22.90	68	77.10	229
市町村作成の副読本	64.31	191	35.69	106
新聞	80.13	238	19.87	59
統計資料	86.87	258	13.13	39
ウェブ教材	81.14	241	18.86	56
物語・紙芝居・絵本・詩	90.24	268	9.76	29
マンガ	98.65	293	1.35	4
実際の映像	82.15	244	17.85	53
ドラマ・映画	99.33	295	0.67	2
シミュレーション画像/動画	90.24	268	9.76	29
VR・AR	99.66	296	0.34	1
音楽・歌	97.31	289	2.69	8
演劇・劇	96.30	286	3.70	11
ハザードマップ・防災マップ	42.09	125	57.91	172
災害遺物	90.91	270	9.09	27
一般的な画像・絵・写真	68.69	204	31.31	93
学校独自の画像・絵・写真	83.50	248	16.50	49
今年度の自校の成果物	86.87	258	13.13	39
昨年度までの自校の成果物	84.18	250	15.82	47

左の数字は%を示し、右の数字は個数を示す。

表4主たる課題

	いいえ	はい		
防災教育を担える教職員が少ない	80.13	238	19.87	59
震災を教員として経験した教職員が減っている	72.39	215	27.61	82
資料・教材が少ない	87.54	260	12.46	37
授業/学習活動のための時間が確保できない	53.54	159	46.46	138
指導方法がわからない	92.93	276	7.07	21
授業/学習活動のための予算が確保できない	86.20	256	13.80	41
被災した教職員への心理的配慮が必要	87.54	260	12.46	37
被災児童・生徒/保護者への心理的配慮が必要	62.29	185	37.71	112
地元地域の理解・協力が得られない	98.99	294	1.01	3
教職員間で防災教育実践への「温度差」がある	78.45	233	21.55	64
教職員間での震災関連の会話が減少	83.84	249	16.16	48
学校のなかで震災関連の行事が減少	93.27	277	6.73	20
地元地域で震災関連の行事が減少	96.97	288	3.03	9
震災を知らない児童・生徒が増えている	38.72	115	61.28	182
教職員の地震・津波への危機意識の低下	89.56	266	10.44	31
児童・生徒の地震・津波への危機意識の低下	83.16	247	16.84	50

左の数字は%を示し、右の数字は個数を示す。

う。一方、指導方法がわからないという項目の割合が小さかったことについては、教員は、日々、指導方法を工夫しながら、震災学習を行っているのではないかと考えられる。

#### 4. 結語

本発表を踏まえ、県別等の結果も加えて、さらなる考察を進めたい。

#### 謝辞

調査項目の選定にあたってご協力いただいた方々、実際の考察においてご指導いただいた先生方、調査にご協力いただいた学校に感謝申し上げます。